

No. 213
動物

シータテハ *Polygonia c-album* (タテハチョウ科)

シータテハはキタテハにとてもよく似たタテハチョウの一種で、キタテハが平地でも普通に見られるのに対し、シータテハは西日本では冷涼な山地に生息地が限られ、個体数も多くありません。キタテハとは翅の赤みがより強く、外縁の凹凸がより大きく、突き出た部分の先端が丸くなることなどで区別されます（写真1）。

和名の「シー」は後翅の裏面中央にあるアルファベットの「C」に似た白い紋（写真2）に由来しており、学名（種小名）の *c-album* も「白いC」を意味します。

幼虫の食草として、国内ではハルニレ、アキニレ、オヒョウ、エノキ、エゾエノキ、ホップ、カラハナソウ、コアカソ、ホソバイラクサなど、多くの植物が記録されていますが、地域ごとに好みがあるらしく、九州ではハルニレとオヒョウ以外は野外において食草にはなっていないようです。

写真1のシータテハの標本は高森町産で、ハルニレから幼虫を採集し、飼育して羽化させたものです。本種の成虫はたださえ九州では見る機会に限られる上、警戒心がとても強く、特に採集が難しいチョウの一つですが、山地のハルニレやオヒョウの葉を見回ると、派手な色彩の幼虫（写真3）が比較的簡単に見つかります。これを大事に育てて羽化させることで、翅の痛んでいない綺麗な成虫が得られるというわけです。ただし、飼育の手間をできるだけ省こうとして大きく育った幼虫を採集してくると、かなりの確率でヤドリバエ類の寄生を受けていて、蛹からはチョウの代わりにハエの幼虫が出てくることになります。資料の収集には、色々と苦勞が伴うものなのです。（中蘭洋行）



写真1 シータテハ（左）とキタテハ（右）



写真2 シータテハ成虫（高森町）



写真3 シータテハ幼虫（高森町）

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301 FAX 0964-34-3302
Email hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP <http://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]
九州産交バス 松橋バスターミナルより宮原経由
八代市役所行き「希望の里入口」下車
徒歩3分

J R 松橋駅より約3km



編集・発行
熊本県博物館
ネットワークセンター
宇城市松橋町豊福1695
Tel 0964-34-3301
2018年8月10日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより



イベント情報 (平成30年8月～11月)

1 博物館ネットワークセンター第3回企画展「知られざる明治の熊本人」

近代国家として歩み始めた明治時代は、国内外の諸問題に直面していく、まさに激動の時代と言えます。そんな時代の荒波を乗り越えようと活躍した熊本ゆかりの人々を紹介していきます。

○開催期間

平成30年7月24日（火）～9月24日（月）
※月曜（祝日の場合は翌日）は休館

○会場

熊本県博物館ネットワークセンター 企画展示室

【関連企画】

1 講演会

- ・開催日時 平成30年8月5日（日）13:30～15:00
- ・場所 熊本県博物館ネットワークセンター 学習ルーム
- ・講師 今村 直樹 氏（熊本大学永青文庫研究センター准教授）
- ・演題 「肥後の維新」をとらえなおす

2 展示解説会（ミュージアムトーク）

- ・開催日時 平成30年8月26日（日）10:30～11:30
- ・場所 熊本県博物館ネットワークセンター
- ※詳細については、熊本県博物館ネットワークセンターまでお問い合わせ下さい。



2 「フィールドミュージアムへ飛びだそう！」へのお誘い

- 半月の観察と撮影「クレーターを写そう」
日時：9月17日（月）19:30～21:30 申込期間：8月20日～8月31日
場所：県民天文台（熊本市南区城南町）
- 地層と化石を観察しよう
日時：10月8日（月）13:30～15:30 申込期間：9月10日～9月21日
場所：梶島（上天草市龍ヶ岳町）
- 落ち葉図鑑を作ろう①
日時：11月18日（日）10:00～12:00 申込期間：10月22日～11月2日
場所：肥後民家村（玉名郡和水町江田）
- 落ち葉図鑑を作ろう②
日時：11月25日（日）10:00～12:00 申込期間：10月29日～11月11日
場所：大滝自然森林公園（球磨郡五木村乙字上小鶴）



月の観察会（昨年度）



落ち葉図鑑を作ろう（昨年度）

センターからのお知らせ

ミュージアムパートナーズクラブに参加してみませんか？



さまざまなMPCが日々活動しています
（左：貝類調べ隊 右：草木染めの会）

熊本県博物館ネットワークセンターでは、「ミュージアムパートナーズクラブ（MPC）」という団体が活動しています。さまざまな博物館活動に主体的に参加することで、熊本の自然や文化について楽しく学んでいけるクラブです。現在、金峰山や動植物、地域の歴史や文化に関する9つのクラブが活動しています。

熊本地震を契機に地域の自然や文化に対する関心が高まっています。みなさんも気の合う仲間と一緒に博物館活動に参加してみませんか？

詳しくは、熊本県博物館ネットワークセンターへお問い合わせ下さい。

No. 209
歴 史

興行日記（美當一調関連資料）

美當一調（本名・尾藤新也、1847～1928）は明治・大正時代に軍事講談師として活動した人物です。講談は話に調子をつけて語り聞かせる演芸で、美當は特に日清・日露戦争を題材とした軍談で名を広めました。

美當は、弘化4年（1847）に熊本市京町の観音坂に生まれました。西南戦争後、正式に軍談師として活動を始めます。その後、「日清戦争談」で全国に名が知られ、「北清事変談」「日露戦争談」も大好評となり各地で興行を行いました。美當は時事的な話題を取り入れた軍談で人気を得て、また、軍事教育という面でも評価されました。

本史料は、明治32年（1899）から36年（1903）までの興行を記録したものです。日記には月日・天候・興行場所・日数・客入りなどが記録されています。写真の部分から内容を一部見てみると、明治35年（1902）3月18日から久留米市で興行、客入りは初日「千百札止」とあり満員、演題は「北清事変」で、これは中国で1900年に起きた義和団事件を題材にしたものです。史料には他にも東京や大阪など各地での興行の記録が記され、その盛況な様子がうかがえます。

今回紹介した史料は、企画展「知られざる明治の熊本人」で展示しています。（松本晃世）

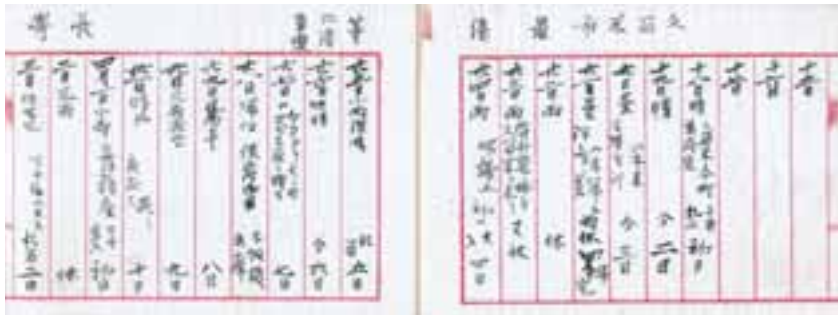


写真 興行日記 本文

No. 210
植 物ジュンサイ *Brasenia schreberi*

ジュンサイは、ため池などに生育する多年生水草です。地下茎は水底をはい、そこから茎が水中を伸びていき、葉は水面に浮かんでいる浮葉植物です。葉は楕円形で、葉の柄は葉の中央につきます。若い芽や葉の柄は透明な粘質物でおおわれています。スーパーなどで売られている瓶詰めの「蓴菜（じゅんさい）」は、このジュンサイの新芽です。

店頭で食品として売られることもあるジュンサイですが、野生のものは非常に少なくなっており、「熊本県の保護上重要な野生動植物―レッドリストくまもと2014―」では、近い将来での野生絶滅が危惧される「絶滅危惧 IA 類（CR）」に選定されています。ジュンサイは、やや貧栄養の水環境を好む植物と考えられており、水質汚濁や富栄養化が原因で減少してしまったと考えられています。

写真1は、現在の熊本市南部にある池で採集されたジュンサイの標本です。①は1961年、②は1967年に採集されたものです。この標本が採集された池は、現在はジュンサイの生育はみられず、ハス、ヒシ、ウキクサの仲間などが多く生育しています（写真2 2018年6月25日撮影）。ヒシの仲間は中～富栄養化した環境を好む植物です。標本から、この池ではジュンサイが好む貧栄養からヒシが好む富栄養へと環境が変化した可能性が見えてきます。（前田哲弥）



写真1 ジュンサイの標本



写真2 ジュンサイ標本採集地の現在の様子

No. 211
地 学

磨き砂（阿蘇-4 火砕流堆積物）

金峰山と熊ノ岳（二ノ岳）に挟まれた地域では、かつて、鍋や釜を磨くための砂を採取して販売していました。『河内町史』によると、磨き砂は嶽村（現在の熊本市西区河内町岳）の特産で、熊本の市街地や小方面へ振り売りし、1升3～5銭で販売していたそうです。

写真は熊本市西区松尾町平山岩戸で採取した磨き砂で、主に細粒のガラスよりなる火山灰です。この火山灰は、約9万年前に起きた阿蘇火山の4回目の巨大噴火で発生した火砕流（阿蘇-4火砕流）の堆積物で、この地域一帯に点在しています。

火砕流とは高温のガスと粉体が混ざり合った乱流であり、堆積する時に高温であれば、火山ガラス同士が溶けてくっつき合い（溶結）、溶結凝灰岩と呼ばれる岩石になります。一方、低温であれば、溶結せずに（非溶結）、火山灰主体の堆積物となります。阿蘇-4火砕流堆積物では、元の地表面と接する部分に、低温で堆積した非溶結の細粒火山灰層がしばしば見られます。写真の火山灰もそのような地層から採取したものです。

磨き砂は、昭和30年代になって、プロパンガスが普及したことでほとんど利用されなくなったそうです。（廣田志乃）



写真 磨き砂に利用される火山灰

No. 212
民 俗

曲げ物の弁当入れ

曲げ物とは、杉や桧、竹などを薄い板材にし、それを円形や楕円形、あるいは方形に曲げて、その合わせ目を桜の皮などで縫い合わせ、それに底板をとりつけた容器です。曲げ物は古代の遺跡からも出土しており、古くから食器や調理器具、様々なものの保存運搬用具として生活全般で使われていました。県内では材料となる杉、桧に恵まれた人吉・球磨地方が曲げ物の産地として知られていましたが、比較的製作が容易なため、県内各地で様々な材料・形状のものが作られていたようです。例えば水上村ではネムノキを、高森町などではハチクを用いていました。

今日でもよく見られる曲げ物の一つに弁当入れがあります。県内ではメンパ、メンツウ、ガエなどと呼ばれます。写真の弁当入れはメンツと呼ばれ、明治から大正時代にかけて阿蘇市波野で使われていたものです。側板は竹、底板は杉で作られ、楕円形に曲げた竹の合わせ目を桜の皮で縫い合わせています。曲げ物の弁当入れはご飯がたくさん入るのに軽いことと、木がご飯の粗熱を取り余分な水気を吸収してくれるため、ご飯が冷めて固くなりにくくなるので、焼き畑や草刈り、植林伐採など山仕事をする人たちが主に利用していました。（迫田久美子）



写真 メンツ（阿蘇市波野 20 × 11.5 × 80cm）